053　北小松　040623

◎昨日の昼頃に、「山に行きたいな」なんて考えだし、天気予報を見ると、お陽さまマークが出ている。台風やら梅雨前線やらというニュースが流れ、「しばらくは　雨か・・」としょんぼりしていたが、近畿地方は暴風雨の被害がなく、天候も回復したようだ。「や　被害に遭われた方には　失礼な言い方で　ごめん」

◎一か月前に行った北小松に行こうと決め、前回の行程を調べ、茨木駅発の電車の時間をみた。7 時 45 分の電車に乗ればいいとメモをした。ところが予定より早く目覚めてしまったので、茨木駅に着いたのが 7 時、すぐきた京都行の電車に乗った。前回、北小松駅から帰る時に、電車は一時間に一本しかないことがわかったので、調べると毎時、25 分に電車が来る。朝の忙しい時間、敦賀方面行はいくつもあるだろうという予想に反して、いつもの一本の電車しかないことが京都駅の時刻表でわかったというショック。

◎そんなわけで、京都から各駅停車に乗りながら、「終点の近江舞子で　いつもの新快速に乗り換えんと　しかたがないね」と思いながらも、「ちょい　まてよ　各駅停車の比良で降り　北小松から帰るのもいいじゃないのかな」なんて思い出した。「昨夜作った登山届を　反対向ければ　すぐに　直るじゃないの」

◎8：45 比良駅から歩きだした。イン谷口までの 1 時間歩行がいやだなと思いながらも、前回の反対向きだと歩かねばと、エンヤコラ歩いた。

◎10 時、元リフトの駅から登り始めた。靴の紐を締め、手造りパンとバナナを喰い、水を飲み、歩き始めた。横を流れる川は小さいながらも滝のように音を立てて流れる。週末はきつく降ったようだ。15 分ぐらいで川から離れ、上へと道は続く。杉の植林地帯を過ぎ、雑木林の森、今頃の季節、樹々の葉も緑の色が濃くなり森の中は空を隠して薄暗い。今日の空は予報通り快晴だけれども、葉が生い茂り空は見えにくい。かすかに白い雲があるかな。緑ギラギラ、針葉樹も広葉樹も葉っぱを広げ、葉っぱの色を濃くして頑張っている。もう少し景色を見せてくれ、というのは贅沢な話、森林浴、大きく息を吸って、吐いて、やあ、気持ちがいいねエ。

◎一か月ぶりの山は、しんどいねえとぼやきながら、エンヤコラどっこい登っていく。北小松駅から釈迦が岳まで 3 時間では登れないが、この道は、イン谷口から釈迦まで 2 時間ちょっとで行けるかもしれない。今日は予定が変更になったもので、登りのコースタイムがわからないが、なんだか空が見えてきた、てっぺんまでそう遠くない雰囲気だぞ。芦生で見た杉、下から二股、三股に分かれ、にょっきり立っていたデカい杉、あれの親戚かね。ブナも出始めた。シャクナゲも葉を広げている。

◎おお、ギンリョウソウ：銀竜草を見つけた。青白い白色、おお、これを見ると幸運が来るぞと勝手に思っている。腐生植物だそうで、ユーレイタケともいわれる。かつて見たのはもう 5 年ぐらい前かな、若狭駒ケ岳の池の側でテント泊の時に見つけた。ほんとに幸運が来るといいね。

◎12 時過ぎにてっぺんの標識が見えた、登った、やった。早速弁当を広げ喰った。玄米ごはんに梅干しと胡麻、ベーコンと卵を入れた野菜炒め、まことに美味い。途中でリンゴを一個まる齧りしながら歩いた。上では 3 人の人が飯を喰っていた。

◎リフト乗り場付近で、40 歳ぐらいのあんちゃんと犬がうろうろしていた。途中で彼らが休憩しているところに追いついた。犬は柴、まったく鳴かずオレを見詰める。うわわ、かわいい奴とオレも見つめる。水をもらって何かを食べている。まだ若いオス犬だ。直下でまた彼らに追いついた、「犬は元気だが・・」とあんちゃんがいう。がんばれ、ポチよ、もうそこがてっぺんだよ。飯を喰っている時に、ふたりは北比良方面に歩いていった。オレは飯が終わって、北小松に向かう。

◎登っていた時から、下の方のどこかでエンジン音がする。杣人のチェーンソーの音か、車のエンジン音や重機のそれでもない、何だろう・・と不思議に思っていたが、ふと琵琶湖が眼下に拡がった時に、あれれ　水上バイクのエンジン音だ、喧しいね、餓鬼どもも、いい年したおっさん連もブイブイやってるのかな。

◎帰りの斜面にその花が落ちて敷きつめられている。スマホで調べると“サラサドウダン”だそうだ。樹の上だとすずらんのようだが、下に落ちると、クリーム色に赤紫の混じった色が無数に散っているのはすごい。

◎空がちょっと曇ったりもしながら 3 時半に無事下山。4 時半の電車で、6 時前に帰り着いた。

054　展覧会　060623

◎展覧会が終わり、やっと平常が戻ってきた。搬出の直後から、台風や梅雨前線のニュースが流れ、いくつかの地方で災害が起きていたようだ。被害に遭われた方には失礼な言い方だけれども、幸いに我が住まいのところは、雨が続いたぐらいですんだ。搬出の夕方、「一杯やるべ」とのことで、自転車で富田方面に行った。おおいに酒を食らい、美味いものを喰い、話した。

翌日は、午前と午後の教室をふたつこなした。午前は昨日と同じ富田の手前まで自転車で行った。最近富田教室の人数が減る傾向、15 人を切るような状態。かつては 25 人ぐらいおられたが、コロナのせいか、オレのせいか、せっかくなのでもうちょっと数を増やさんといけませんね。

午後はわがアトリエで、常連の三人の方がたと過ごした、みなさん、いい絵が進んでます。

その翌日は、さすがに疲れがどっと溜まり、迫力もなく昼寝を交えだらだら一日を過ごした。そのだらだらが功を奏したのか、元気が出始め、「え　明日は　晴れ」なんて浮かれ、いそいそ山の用意、翌日は電車で比良方面に行き、一日、山の中自然に中で過ごした。

◎登山の前日の朝、「久しぶりに描きたい」と新しいキャンバスを 3 点、古い絵を 3 点、アトリエに広げた。白いキャンバスに、いつものように青い色を、次のキャンバスに紫色を、それぞれ一筆入れてみた。久しぶりの新しいキャンバスに新しい色を入れる感触、心静かに、スーイスイ、色が入った。古い絵は、2020 年の日付がある。描き終わって、「これでよし」とサインを入れているが、絵が汚い、ポイントがずれている・・なんて思い、板に貼って直そうと企んでいた。

◎駄作は、修繕しても再生しない。駄作は、修繕の回数を重ねるほどに、より駄作になる。今までさんざん苦しめられてきたことである。何十回も、何百回も、駄作の修繕をしてきたが、いろいろな方法を重ねたが、上手くいかない。これだという方法がない。そんなに難しいこと、上手くいかないことなら、駄作は破棄していけばいいじゃないの、という考え方もある。ゲンにお習字の時は、気軽に、「あかん」「また　あかん」と失敗した紙を丸めてごみ箱に捨てている、その方法で行けばいいじゃないの、と思ったこともあるが、なかなかゴミ箱には棄てがたい、お分かりいただけるかな、ほほほ。

◎「絵を描くことは、スポーツじゃねえんだ」なんて言い訳をしながらも、いつも肝に銘じる言葉がある。いつも肝に命じながら、実行できずに、裏目裏目に出てしまう。「無心になれ」これだ、欲をかくな、いい絵を創ろうと思うな、いやむしろ、絵を描こうとも思うな、キャンバスに色を入れるだけ、ただ入れるだけ、手も頭も無視して、ただ色を入れろ。

よく言うじゃない、「勝とうと思うな」とか、「相手を意識するな」とか、「無心で行け」とか、とか・・。

この言葉は、スポーツだけにあるんじゃなくて、人生の言葉だよな。

◎前置きが長くなったが、修繕する駄作、「部分修繕ではなく　大きく色を入れて、それから次の手を考えよう」とたっぷり絵の具を作って、そろり、さら一り、筆を下ろした。「お　いいじゃない」へらでなぜ、布で拭いた。翌日、立て掛けてみると、「お　いいじゃない」から出世して、「これでいいじゃないの」になった。ただねえ、なかなか、思い切って筆を下ろせないのがオレなんですよ。次回からはなんでも棄てる気で行くぞ、とはかけ声だけで終わってしまう。この絵は早速撮影をした、嬉しい出来上がりである。

◎展覧会の始まる一か月ぐらい前から落ちつかなくなっていった。出す絵は、あれとこれ、と決まっているのに、何をするわけでもないのに、落ち着かず絵も描く気が湧きあがらなかった。会期中は人と会い、人の顔がちらつき、その会話が頭の中を駆け巡った。もちろん絵も描かなかった。

◎車から絵を下ろしたのは、三日ほど経ってからだった。久しぶりに晴れ、ドアーを開けると温度が上がっている。暖かい絵を一枚一枚と下ろし、アトリエに担ぎ上げた。オレの車では、今回の大きさと枚数がやっと乗ったという感じ。そろりそろりと積み込んだ。またそろりそろりと運び出した。大きな黄袋を枚数分作れば台車で運べたかなと反省もある。黄袋とは、黄色い布で作った袋、絵を収納する袋の事。黄色の天然染料は殺菌効果があると聞いたことがある。もっとも今は化学染料で染めているはずだが、いまだに黄色い布を使う。

055　古事記　100623
三浦祐之著＜口語訳：古事記＞
◎さすがの大君も、もう聞くことが無くての、時を延ばす手立てもなくなり、ついにサホビコの稲城に火をつけて焼き殺してしもうたのじゃ。その時、その妹ごのサホビメも、兄に従ごうて死んでしもうたのじゃった。

◎先生：大君：イクメイリビコと后のサホビメ、后の兄サホビコ、この三人の人間模様。
ひとりの女性をめぐるふたりの男の対立と葛藤と読めば、二男一女の恋愛物語。万葉集や日本書記に書かれた、額田王と、中大兄皇子と大海人皇子も、二男一女の恋愛物語。謡曲“求塚”のウナイオトメの悲恋物語も、二男一女の恋愛物語。
一般的な、二男一女の恋愛物語では、男は同じ立場にあり、女がどちらかを選べず、自殺する。
サホビメの場合は、夫と兄であり、兄を選ぶという意志的な行動をとり、兄とともに死を選ぶことで、関係を成就させている。この積極的な関係は、兄妹という、社会的な禁忌を抱かえているかもしれない。
兄弟の絆を強調するだけの読み方、子、ホムチワケはどちらの子か、そういう詮索は不毛では・・。
この物語は、文学作品として、叙事詩として、語りの物語として、見たほうがいい。

◎ウナイオトメ：奈良時代よりの伝説。摂津の国菟原：現在の芦屋（当時湿地帯に茂る葦で屋根を葺いていたのが由来）
菟原処女（ウナイオトメ）という可憐な娘がいた。同じ里の菟原壮士（ウナイトトコ）、和泉から来た茅渟壮士（チヌオトコ）という二人の男が彼女を深く愛し、妻に迎えたいと対立した。「賤しい私のためにりっぱな方々が争うのを見ると　生きていても結婚など・・黄泉で待ちます」そう母に語り自ら命を断った。チヌオトコは夢でウナイオトメが愛していたのは自分だと知り、あとを追った。ウナイトトコも、負けるものかとあとを追った。その後親族たちが、娘の墓の両側に男の墓を作った。

◎生れ落ちるとともに母に先立たれたホムチワケの御子、生まれついてもの言わぬ御子じゃった。
さて、大君は、サホビメが残した御子ホムチワケの病を癒そうとしていろいろなことを試した。
◎二股の杉の木を伐り、舳先が二股の丸木舟を造せらた。大君と御子がそれぞれ舳先に乗って、ゆらゆら揺れると御子はもの言うはずじゃという者がいたからだ。しかし、いくら試してもだめだった。
◎ある時、大空を翔る大クグヒ（白鳥）の鳴き声を聞いて、御子が顎をパクパクものを言いたそうにした。大君は、鳥取り（ととり）男にその鳥を取らせなさった。男はその大クグヒを追って、針間、稲葉、近淡海（ちかつおうみ）、尾張、科野（しなの）、高志に至ってやっと追いつき生け捕りにして倭にもち帰った。その鳥を見た御子はやはりものをいうことはできなかった。
◎悩んでいた大君が夢を見た。「わが宮を、大君の座す大殿と並ぶほどに作り修めたならば、御子は話す」大君は、「どこの神だ」と占うと、出雲の神だという。
◎そこで、その御子を出雲の大神の宮に連れて行って拝ませることにした。それで占いには、お伴はアケタツがいいという。
アケタツはウケヒで、「この出雲の大神を拝むことによって　まことに験があるならば　この鷺巣の池の樹の上に住んでいる鷺よ　ウケヒによって落ちよ」次いで、「ウケヒによって生きよ」と繰り返した。樹の上の鷺が落ちて死んでしまい、再び生き返った。
続いて、甜白檮（あまかし：甘樫）の前に生えておった葉の広いクマカシの葉をウケヒによって枯らし、また、ウケヒによって生かしたのじゃ。
それですぐさま、ホムチワケの伴として、クマカシを従え、出雲の大神のもとに遣わしたのじゃ。
その出で立つ道を決めるにも占いをした。・・次に続く。

056　古事記　120623
三浦祐之著＜口語訳：古事記＞
◎ホムチワケの伴として、クマカシを従え、出雲の大神のもとに出発する前に、その出で立つ道を決めるにも占いをした。奈良山を越える近道を行くと足の萎えた者や、目の見えない者に逢うだろうし、河内へと抜ける大坂山を超える道を行っても、足の萎えた者や、目の見えない者に逢うだろうから、遠回りになるが、木の国を抜ける掖月（わきづき）の出入り口がよいと占いに出た。

◎先生：倭から出雲に行くには、北上して京都に抜けるのが普通だ。神に祈る場合、様々なタブーがあり、厳重な物忌みがかせられる。足の萎えた者や、目の見えない者に逢うことによって、穢れが生じないために・・。
◎オレ：以前読んだ民俗学の本の中に、奈良坂付近に、穢多、非人の集まったところがあり、その人たちを頼って、身体障碍者や癩病（ハンセン病）患者も集っていた。古事記の時代にすでにそうであったかは知らないが、すでにその当時もそうであったのでは、としておこう。
奈良坂・清水坂両宿非人争論：鎌倉時代、奈良の興福寺に属する“奈良坂非人”と、京都の清水寺に属する“清水坂非人”が近畿の各宿駅の非人を支配していた。清水寺は興福寺の末寺であったが、延暦寺の支配下に入ろうとしていた。

◎そうして、ようやく出雲に到りつき、すぐに大神を拝み終えて帰り上ろうとする時に・・その中洲に、にわか作りの宮を作って御子を籠らせたのじゃ。
◎神を祈り終えて、その神の許しを得るまで精進潔斎してお籠りをする。
◎その時御子がにわかに、「この川下に立てられた、青葉の山のごときものは、山に見えるけれども山ではない。もしや、出雲のいわくまの曾の宮に坐す、アシハラノシコホ（オオクニヌシの別名）の大神を斎き祀る神主の祭の庭の設えではないか」と尋ねた。
◎御子がもの言うたのを聞き、ホムチワケの御子をアジマサの長穂の宮に座まして、都の大君のもとへ早馬（はゆま）の使いを急がせたのじゃ。突然話し出したのは、出雲の大神の怒り（祟り）がとけたことを意味する。

◎その時のことじゃが、ホムチワケの御子は、一夜、ヒナガヒメ（肥の河の女神か、その正体が蛇ということは、ヤマタノオロオチを連想させる）と共寝をなさったのじゃ。そしてそのあまりの美しさに、ホムチワケはひそかにヒナガヒメを覗き窺うておると、なんと、人ではのうて蛇だったのじゃった。それで驚き恐れたホムチワケは、船を出してヒメのもとを逃げ出してしもうた。すると、ヒナガヒメはホムチワケが逃げ帰ったのを悲しみ怒っての、海原を照らし輝かして船に乗って追いかけてきたのじゃ。それを知ったホムチワケはますます恐れおののいて、山と山の谷間にみずからの船を引き上げての、山を越えて逃げていったのじゃ。

◎先生：このあとのことは何も語られていない。サホビメの残したホムチワケの御子は、もの言うことができるようになり、さてそのあとは何も語られていないので、こともなく過ごされたのでは・・。

◎御子の供をしたアケタツは大君の前に額ずき、「出雲の大神を拝み祀ったおかげにより、ホムチワケの御子はもの言われました・・」
◎大君は喜んで、すぐさま、アケタツの家来のウナカミを出雲の国に引き返らせての、先の夢のお告げのままに、出雲の大神の宮を、大君の大殿のごとくに作り飾らせなさったのじゃ。
◎出雲の大神オオクニヌシが天つ神に国を譲る条件である、「天皇の宮殿と同じ大きな宮殿に住まうこと」この神話に従って、朝廷は出雲大社の改築・修繕を行うのである。

057　ぼやき　130623

◎先日、楽しい夢を見た。起き上がってしばらく、何となく嬉しくてにやにやしていた。その夢というのは、どなたかがオレの絵を売ってくれるという話である。どこのだれかはわからない、多分どこかの画商さんだろうけれど、「あの絵が売れそうです　多分売れますよ」という情報が入って来て、オレは素気なく返事をしていた。「あれは売れて当然　それだけの価値があるよ」と口には出さないが、ドヤ顔でうなずいていた。「いよいよ　オレの絵も　売れだしてきたか　そらあ　当然だよ　最近のオレの絵は　売れるよ」絵は 70ｘ40ｃｍぐらいの横長の絵、画面の左上から斜めに赤っぽい色の絵具が多少分厚く塗られていた。茶色か赤色か、渋い色調の絵具が光沢無くマットな画面で筆が走っていた。まさに今のオレの絵である。売れた絵は額装がしてなく、キャンバスを巻き込んで厚みが 5ｃｍもあった。「ああ　もうちょい　売れればいいねエ」と思っているが、「今の絵　売れて当然　誰か早く売ってくれよ」と期待しながら待っている日々である、と、笑い。

◎画商の話に移るが、最近同級生の早川君が亡くなった。一年前には同じ歳の水野さんが亡くなった。水野さんとは、20 歳代で初めて個展をした白鳳梅田画廊の従業員だったので知り合った。60 歳ころに、「うちで　展覧会しますか」と声をかけてくれたので 10 年ぐらい続けた。酒の好きな方だった。オレのまわりに、酒がやめられない方が何人かいる。昼飯にビールを、「これはお茶がわり」夜になると 2.3 時間かけたっぷり飲んで寝る、そんな酒の日々を、毎日、まいにち楽しんでいる。オレもかつて彼らと同じように飲んでいたが、毎日のジョギングがしんどくなって走れない、山が途中で登れなくなる，「なんでだろう　病気かな・・」と思っていた。「ひょっとしたら　酒じゃないかな」徐々に酒量を減らしていくうちに元の元気な身体になっていった。毎日飲んでる彼らには顔向けができないが、オレは“元気”を優先した。話はとんだが、水野さんは 75 歳前ぐらいに亡くなった。早川君は聞くところによると、認知症が出始め暴力的になったらしい。「ま　ちょっと入院を」と入って、一か月先に家族が見舞うと激ヤセ状態で意識が薄れている、「なんだかおかしい　これは　こんなところに　置いておけない」と転院をしたらしい。転院した先で、「この状態では・・」と医者が首を振り、しばらくして亡くなった。二人しかいない親しい画商が亡くなって、その関係の方のコネが切れてしまった。とはいえ、その二人は、オレの絵を扱ってはくれなかった、ただ、親しい間柄だっただけである。水野さんはかつて、延べ金額で 100 万円ぐらいは動かしてくれたかな、これはたった 100 万円という数字だ。

◎オレの 50 歳前ぐらいだったか、バブル時代というのがあった。知人の何人かが言っていたことに驚いた。「今はね　真面目に物を造って　売ってる　場合じゃない」「金はいつでも貸してくれる　その金を使って投資する　すぐに儲かって　帰ってくる」「物を作って　売った儲けの　何倍かの儲けが　帰ってくる」「バカバカしくって　物なんか　真面目に造ってる　場合じゃない」そう高笑いしていた。「見てくれ　岡村　先日買った絵だ　3 億円で買った　どう思う・・」20 号ぐらいの小磯良平の絵だった。「ばかもんめ　仕様もない　つまらん」と心の中で呟きながら、「ああ　そう　いいね」と笑っていた。投資に走って高笑いの何人かの御仁はいつの間にか消えてしまった。おそらく倒産、破産の地獄にまみれてどこかに消えてしまったのだろう。

◎オレはつい最近まで、画商という商売は、オレ達が描いている絵を売ってくれる商売人、早く彼らに見つけてもらいたいものだと思っていた。オレって、バカだねえ、気が付くのが遅すぎる、お人よし過ぎる、ものを知らなさ過ぎる。「画商という方々は、マネーゲームの御仁だ」彼らは株屋と同じ、ハゲタカファンドと同じ、金を転がしてあたふたする御仁、物の良し悪しなんて二の次三の次、儲かればいいだけの生き方の奴らだよ、と今頃になってやっとわかった。先日も、「なんで　世界は　こうなった　金のことしか言わない世界　儲かればいい世界」と話していた。「アメリカの圧力で　今までの規制を解かざるを得なかった　どっと　ハゲタカが押し寄せた・・」経済の話はちんぷんかんぷんのオレだが、マネーゲームはいただけないね。
亡くなった早川・水野の両さんの悪口になってしまったが、ふたりはいい友人だったとだけ、いいわけを。

058　天狗岳Ⅰ　200623

◎桜平（唐沢鉱泉の隣）の駐車場に来ている。マリちゃん（仲のいい方の娘さん）と連絡を取り合い話をつめつつ、「それじゃ　車で　2 時に　迎えに行きます」「了解　お願いします」と話が決まりいつもの散歩に出かけた。「まてよ・・2 時・・まさか・・」あわて帰り電話を入れた。やはり、まさかの思惑通り出発は早朝の 2 時、「え　それじゃ　あと半日先・・」本当にあわてたねエ。

◎2 年前、番匠さんと信州を同行し、彼は編笠山へ、オレは今回と同じコースを歩いた、おお懐かしいコースをまたもや行けるとは、と喜びながらも、近所のスーパーでパンやら何やらを買いに走った。40L と 60L のザックを出した。駐車場からテント場までの 1 時間半、なんとか 40L に入らないものかと出したり入れたり。あれを減らしこれを減らし、あれとこれをザックの外に結び付け、何度もやり直し、なんとか 40L に入った、どうにかさまになった。荷を計ると 16 キロだった。

◎2 時出発なら 2.3 時間は眠りたいと努力をするが、明日の行程を考え、あれをこれをと思案が頭を駆け巡りますます頭が冴えてくる、1 時間ほど横になったが寝つけず迎えに来てくれた車に乗った。ガキの頃から“眠り”が下手な人生、50 歳までは布団に入って眠りにつくまでの長い時間を持て余し、50 歳を過ぎてからは昼間が眠いといつも悩む、というマイナーな“眠りべた”の人生だ。

◎車の中でも眠ることもできず、早朝の 7 時頃駐車場が近づいて来た。日曜日の朝、車が多い、手前の駐車場から満杯状態だが奥に空きがあるはず、今日は日曜日だからこの時間に駐車場を出発している人もいるはず、もっと奥へ、登山口の近くまでもっと・・道路の膨らんだところの迷惑駐車を横目に見ながら奥へ進んだ。「空いている　ラッキー」一番奥の空いたスペースに車を止めた。八ヶ岳は関東方面から 3 時間でやってこられる山、オレがいつも日帰りで行く滋賀県の奥の山と同じ時間で来られる山、人気の八ヶ岳だ。東京在住の人にとってこのあたりは、日帰りか、軽く一泊で楽しめる山である。

◎登山靴を履き、7：30 出発した。まったくの徹夜明けながらなんとか歩ける、足取り軽く歩ける、まずはなんとか行けそうだと感じた。前回は 60L のザック、「たった 1 時間半　なんとかなるだろう」食料もたっぷり持っていったのだろうが、2 時間ほどかかり着いた時にはおおいにばてていた。今日はなんとか 1 時間半、ばてることもなくオーレン小屋に着いた。

◎9：30 テント設営が完了。「空は　白いね　あれれ　青くない　晴れてはいるが・・」前回張った場所の近くにテント設営、懐かしい樹がひょろり立っている。あの樹だと思いながらも空が青くないと魅力半減である。ザックの中身を抜いて、水と行動食、雨具ぐらいをもって天狗岳を目指した。

◎箕冠山（みかぶりやま）までの 1 時間、森林地帯をなだらかに登っていく。その乗越に上がったとたんに目の前の風景が一変する、樹林帯が終わり土と石と緑が織りなす信州の山の風景、「おおお　いいねえ　素晴らしいねえ　たまらんね」白っぽい石、黄土色の土、その間をハイマツが地面にピタリ張り付くように模様を造っている。八ヶ岳は火山の山、いくつかの噴火でできた八ヶ岳山系、いつ来てもいいねえ。

◎元気だとはいえ徹夜明けの登山、それでなくても足が遅い、おまけに重い荷でおっとっとと転びかけた。それでなくてもバランス感覚はよくないオレ、今日は慎重に歩かねば、どこかがおかしくなればすぐ引き返そうと心の中で思っている。70 代のジジイが徹夜明けで 2500M の山を登っている、三点確保、四点確保で進まなくては。いつもいうように、「高所恐怖症の山屋でやんす」「自慢じゃないが　槍ヶ岳は何度も登っているが　穂先にはいかないよ」若いころから冬半分夏半分何回も槍には来ているが、穂先は見向きもしない。説明しますと、槍ヶ岳という山は、稜線を登りきったところに小屋がある。オレはその小屋が槍ヶ岳の終点としているが、その横に岩の三角錐がある。小さいビルぐらいのスケールの三角錐、岩ごつごつ尖っている。以前 10 歩ほど登りかけてやめた、それ以来近づいていない、皆さんに笑われそうである。

◎元気なマリちゃん、「先に行って　スパゲテイ　造ってる」「おお　楽しみ」なんと根石岳の上で豆粒のような人影が手を振っている。「早いね　強いね」ようやく登っていくと、お皿にミートソースとカルボナーラとサラダが並んでいる。まるでレストラン、美味いねえ、きれいねえ、すごい。

059　天狗岳Ⅱ　210623

◎鉄の橋を渡って、すぐ上が頂上だ。「登れた　うれしいねえ　最高だ」ここは石の山、石がゴロゴロしている、「長居は無用　さ　帰るべ　ゆっくり　下ろう　慎重に」先ほども言った三点確保、四点確保、石をつかみ、石に手を突き、そっと足を下ろし、次の足を下ろし、滑らないように確実にゆっくり降りた。ジジババも何人か見かけたが、皆さん慎重にゆっくり進んでいる。「わかいもん　だけの山じゃ　ないもんね」

◎まだ時間は 2 時前、まっすぐ帰れば 30 分でテント場に着くが、硫黄に向かって夏沢峠から下ろうと歩き出した。硫黄の噴火壁が、近づくにつれ見え方が変わっていく、今日はその表情がたっぷり拝めた、おおお、おおお、感激の雄叫びである。

◎硫黄の火口壁、天狗からみた時はなだらかな縞模様が山の形に添って流れ、穏やかな水流を思わせる模様に見えたが、近づくにつれ、あれは黒い岩のささくれ立ったものだったのか、あれは硫黄成分の黄色が跳ね返ったものだったのか、あれは黒焦げのあとだったのか、地球の動きをタイムリーに見せてくれた。

◎3 時ころにテントに帰り、ウイスキーをちびりとやり始めた。オーレン小屋は水が豊富、蛇口をひねればたっぷり水が出てくる、そばの川の水だけれど、冷たくて美味い。ボトルで水を汲んで、ウイスキーにその冷たい水を入れ、ちびりちびり、美味い。鶏肉を煮込み喰った、これも美味い。今は夏至に近い季節なので 8 時ころまで明るかったが、空の景色を見ることもなく、シラフに潜り込んでまもなく眠り込んでしまった。朝、明るいので時計を見るとまだ 4 時、それからまた寝た。

◎朝飯を食って 6 時前に硫黄岳に向かった。予定では、向こうの赤岳鉱泉からの交差点“赤岩の頭”から硫黄の予定だったが、時間もあるし“峰の松目”行ったことが無いので寄ってみようとひとりで登り始めた。歩き始めて、「今日は元気だ　たっぷり睡眠をとったので」と歩き始めたが、やはりまだまだ疲れている、もうすぐそこが頂上だと思うがてっぺんも樹林帯の中だ、「これはつまらん　帰ろ　硫黄に行こお」てなことで 1 時間のアルバイトはつまらなかったが、硫黄に近づくにつれその尾根道に陽が射し、濡れた苔が緑にみどりにみどりしてくる。「このみどりはキレイ　道くさくった　罰ではなく　この御褒美が　いただけた」まだまだ樹林帯、白い幹の木、あれれ、ダテカンバかな、いやいや、ダテカンバの葉は広葉のはっぱ、ここの木の葉っぱは針葉樹のそれである、なにかな。

◎やっと高木の樹林帯が終わり、道が見えないぐらいにハイ松が茂っている、ハイ松をかき分け登っていく、硫黄が見えてきた。何度も来た道、標識のある所から硫黄の山頂まですぐだと思っていたが、だらだら上って行かなければ、エンヤコラと登りだした。このあたりの小石、軽石である。白いもの黒いものクリーム色のモノ、軽石なんだ。まもなくてっぺんというところで岩と石の道がある。昔、80L のザックを担いでいた頃、ザックが岩にあたり、オットトと緊張したことがある。軽い荷の今は普通に歩ける岩の道、荷が重いと歩きにくかったのである。

◎同年配ぐらいのひとり山の女性が話しかけてきた。地元出身の彼女、今は東京だそうだが、長野の高校生時代、山岳部に入っていろいろ歩いたらしい。今は足が悪く、というが、ゆっくり確実に歩いている。夏沢鉱泉に泊まって、硫黄から硫黄岳山荘で今日は泊まるという。足が悪い、車がない、それで茅野までの送迎がある夏沢鉱泉をベースにしているという。てっぺんで、「気をつけて」と別れた。

◎硫黄のてっぺんに立ったころから雲行きが怪しくなってきて、白い雲が山々に流れ込んできた。天狗も赤岳も、麓も北アルプスも見えていたのに、急に霧がかかり寒くなってきた。「あちゃあ　今日はいい天気の予定じゃないの・・」とぼやきながら、硫黄の御鉢を歩いている。

◎10 時ころにテント場に帰り、稲庭うどんをごちそうになった。天カスに薬味、今回の山は贅沢させてもらった。1 時頃、車のところにたどり着き、6 時ころに家に帰った。ずっと助手席で楽をさせてもらった。

◎オーレン小屋は人が多かった、なかなか人気のある小屋のようだ。幾組かのご夫婦を見ていた。おっさんがえらそうに言い、奥さんが素直にうなずく方、その反対の方、また年季の入った夫婦ながら、べたり仲のいい夫婦、様々な人間模様がうかがえた。なんといってもべたり仲良しがいいですぞ。

060　　古事記　250623
三浦祐之著＜口語訳：古事記＞
◎さて、サホビメの亡きのちは、ホムチワケの御子のこともあって后をもたないまま過ごしておった大君：イクメイリビコじゃが、サホビメの遺した言葉のまま、ミチノウシの娘たちを召し上げることにしたのじゃ。
◎先に、大君が、「下着の紐はだれが解くのか」サホビメが死を覚悟して、「ヒコタタスミチノウシの娘　名はエヒメとオトヒメがよいでしょう」と答えていた。
◎さて、サホビメの亡きのちは、ホムチワケの御子のこともあって后をもたないままに過ごして負った大君じゃが、サホビメの遺した言葉のままに、ミチノウシの娘たちを召し上げることにしたのじゃ。それは、ヒバスヒメ、つぎにオトヒメ、つぎにウタコリヒメ、つぎにマトノヒメ、あわせて四柱の娘たちじゃった。
ところが、召しだされた娘たちのうち、ヒバスヒメと、オトヒメのふたりは留めて妻としたのじゃが、妹のふたりはの、その姿形がはなはだ醜いというので送り返してしもうた。

◎マトノヒメは、「恥ずかしくて耐えられない」と帰り道、相楽から北に向こうて弟国で深い淵に身を沈めて死んでしもうた。
◎ウタコリヒメのことは何も語られていない。

◎一般的にも、そしてオレも含めて、「美女がいい　可愛い女性がいい　ムードのあるヒトがいい　スタイルのいい女がいい」若いころはいろいろめぐらし勝手なことをほざき、あれだこれだと希望欲望を並べ、叶うはずもないわがままもあったはずだが、すっかり忘れ、時が過ぎ早やジジイになってしまった。下らぬことをぼやいていたものだと思うこともなく、我ながら色気もうせてしまった。
ブス女は嫌だ、これは永遠の話しなのかもしれないが、今になって思えば美人の賞味期限は十年二十年で切れてしまう。その、十年二十年が経った頃に世のなかがひっくり返り、ブス女、醜い女、恰好の悪い方々が俄然輝きだし、魅力にあふれ、「え　あれは　あの子　あの方」と形勢が逆転する、これはほんとうだよ、ほほほ。
今、多くの方々の青春時代の写真を見ている。母校の同窓会から“かるた”をつくるので絵を描いてくれという依頼があった。膨大な量の写真を見ている。会ったこともなく、世代も違う知らない 17 歳くらいの少年少女の写真に見とれている。どれもこれも希望に満ちている。憂いも悲しみの影などもない、なかなかに可愛い少年少女たちの顔を拝んでいる。「ぶさいくな　少女だな」と思う少女らが子育てをする頃にはいい女に変身しているはずだとその姿を想像している。

◎イクメイリビコの大君のことで、いまひとつ語っておかなければならぬことがある。
◎大君は、タヂマモリを常世の国に遣わして、トキジクノカクの木の実（今のタチバナ）を探させたのじゃ。この実を食べると永久（とわ）の命を得ることができると言われておる木の実での、海のかなたの、誰も行き着くことのできぬ常世の国にあると言われておる木の実じゃった。
◎タヂマモリは、長い時を経た苦しみの末に、ようやくのことで常世の国に行き着いての、その木の実を採り、“縵や縵（かげやかげ：木の実を縄に下げ輪にしたもの）”“矛や矛（ほこやほこ：木の実を串に刺したもの）”をつくって持ち帰ったのじゃ。
ところが、常世から戻ってみると、大君はすでに亡くなっていた。
◎イクメイリビコの大君は、百あまり五十あまり三歳（ももとせあまりいそとせあまりみとせ）での、御陵は菅原の御立野（みたちの）の中にあるのじゃ。

061　　ぼやき　280623

◎安威川河川敷を走っている。「あ　IC レコーダー　忘れてきた」「ならば　スマホで・・」先日、大坂に出向いた、ならばついでにと、四つの用事をこなしてきた。行く前に、「まず原商店で　綿布」「次に　歩いて書展を」「次に　メイシアターで　福地さんの落語会」「茨木に帰って　弁慶さん宅へ」

◎先日、湖西の駒田さんに電話を入れると、最近需要がないので、綿布を織っていないという、「え　綿布工場で綿布がない」と衝撃の話である。昔、買っていた、どぶ池の原商店を検索すると、昭和初期の手描きの看板がまだそこに見えた。行ってみると主人は 2 年前に亡くなっていた、10 年以上のご無沙汰だ。綿布も数が少なく値も高い。駒田さんでは 100M16500 円だったが、原商店では 50M24000 だそうだ。永らく絵を描いてきて、画材が切れる、材料が売っていない、これは衝撃の話し、この平和な時代にである、もう一度駒田さんにアタックしてみよう。画材でまいったもう一つは、“ゴールデン”のアクリル絵の具のこと。もう 40 年以上使い続けてきた絵の具なのに、「取り扱いがなくなりました」と言われびっくりした。“ホルベイン” や “やリキテックス”を代用してこの 2 年なんとかやりくりしていたが、茨木の彩美堂で、「ゴールデンと同じ製品が　ターナーから出てます」という。当時、ターナー社がゴールデン絵の具の代理生産をしていたらしい。オレはてっきりアメリカから直送の製品を販売しているものだと思っていた。ターナー社は絵の具の名前を変えて、“U-35” そのアクリル絵の具を販売している。試しに買ってみたが遜色ない。「ありがたい　これで　まだまだ絵が描ける」とほっとしたが、同じ製品をそのまま売り出すとは、せこい会社と考えてしまうね。

◎大阪本町界隈は 20 年ぶりか、地下鉄のどこが出口か、右か左か、うろうろしてしまった。どぶ池を出発して画廊に向かった。「スマホで　グーグルマップを」なんて検索すると、目的の画廊が出ている。「？？」驚いたが、昨夜パソコンで検索をしていたのが、スマホに連動しているらしい。「おおすばらしい」とその案内で歩いた。画廊はささやかな空間で喫茶店でもあるらしい。小さい書と篆刻がいくつか飾られていたのを楽しんだ。「何か飲みますか」「それじゃ　昼飯を兼ねて　パンを・・」

◎1 時半に吹田のメイシアターに着いた。山田さんがホールで座っている。一か月先の山の話しをした。オレは信州の山に行きたいが、山田・三宅のお二人が足の調子が悪いとおっしゃる。足の治るのを待ちましょう、今回は中止にしましょう、ということで舞台を見に入った。
主役の福地さんは、もと鹿島建設のブイブイ幹部会員だったが、定年後、シャンソンを習い何度か舞台を、次に俳優になってその舞台も二度ほど見た。次いで、月亭八方の弟子の教えを受け、今回 10 人足らずの方がたとの初舞台。オレと同年配の女性のあとに福地さんが出た。その女性も途中でつまり、「もとい」なんて言いながら難なくこなされた。福地さんも最初の枕でつまづき、「おお　大丈夫かいな　みてられんな・・」と下を向いてしまったが、そのあとが快調に走りだし、大きな声、動作、面白い話が進行していった。

◎そのあと、茨木の弁慶さん宅に集まった。駅前のスーパーで、相澤・番匠・三宅・岡村が合流し、お惣菜や酒を買い玉川団地に向かった。たくさんの酒、たくさんのお惣菜、いくつかの料理も用意してくれた。「うまいさあ飲もう　楽しいねえ」と時間が過ぎた。「7 月末の　信州の山が中止になった」「上高地に行こうと　思っていましたが・・」「それ　復活で　行きましょう」話はとんとん拍子で決まった。
酒好き、話し好きの三宅さんが、ハイピッチでメートルがあがる、大きな声で、同じことを話し出す。「こらああかん　もうちょっと静かに」と注意するももう止まらない。オレも、そんなこんなで酩酊して自転車で帰った。「あ　自転車　ライトが付かない方に　乗って来てしまった」目を凝らして暗い道を走って帰った。翌日、夕方の 4 時ころ河原を走っていると、三宅さんから電話があった。二日酔いのかすれただみ声、まだ酒が残っていそうな状態でのラブコールだった。